



であい

公益社団法人

北海道国際交流・協力総合センター
HIECC/ハイエック

Hokkaido International Exchange and Cooperation Center

JENESYS 「北海道・韓国地域遺産」 発掘・発信交流事業」

外務省は、日本とアジア大洋州の各国・地域との間で、対外発信力を有し、将来を担う人材を招へい・派遣し、政治、文化、歴史等への理解を深め、かつ人的交流を通じ一層の相互理解増進に寄与することを目指す交流事業「JENESYS (Japan-East Asia Network of Exchange for Students and Youths)」を実施しており、ハイエックでは、当該事業の韓国青年招へいに係る地方プログラムの一環として、これまで、道内視察先の調整やホームステイ受入れなどの協力をしてきたところ。

今年度、北海道庁の全面的な協力のもと全日程を本道で受入れる事業を企画・提案したところ、採択され実施する運びとなり、北海道の韓国友好提携 4 地域(ソウル特別市、釜山広域市、慶尚南道、済州特別自治道)から、それぞれ 5 名ずつ選抜された大学生と団長と引率(韓国外交部)全 22 名の訪問団が 11 月 22 日から 12 月 1 日の日程で来道した。

本事業では「北海道遺産」に焦点をあて、北海道の自然・文化・産業などの中から、北海道民が次世代に遺したい地域の宝ものとして選出したことなど「北海道遺産」の概要を説明するとともに、実際に「登別温泉地獄谷」や上士幌町の「旧国鉄士幌線コンクリートアーチ橋梁群」等も視察した。

また、アイヌ文化についての理解を深めてもらうため、白老町ポートコタンの視察、二風谷アイヌ文化博物館では、北海道遺産の

一つ「アイヌ文様」のコスター製作を体験した。更に、アイヌ文化の伝承活動を行っている札幌大学「ウレンパクラブ」の学生達との交流会も開催した。

プログラム中、韓国青年は、北海道遺産を守り・育て・活用していく取組に強い関心を示すとともに、その取組や体験内容、訪問先の魅力について、本事業において学生に課せられた重要な活動である「SNS を通した対外的発信」を毎日行い、発信回数は滞在期間の 10 日間で 900 を超えた。

最後の報告会では、ホームステイの思い出や、帰国後のアクション・プランについて発表。帰国後も引続き北海道の魅力を発信し続け、北海道との繋がりを大切にしたいとの意欲を示していた。



札幌大学「ウレンパクラブ」の学生との交流を終えて

国際交流 in 積丹

11月25日(土)～26日(日)

今年で 17 回目となる「国際交流 in 積丹」(主催:積丹町教育委員会)が 11 月 25 日(土)と 26 日(日)の 2 日間で行われ、中国、ベトナム、フィリピン、シンガポール、台湾、バングラデシュ、ウクライナ、マラウイ、パラグアイ、アルゼンチン、ブラジルから 10 か国・地域 12 名の留学生が同町を訪れた。

北海道を代表する民謡「ソーラン節」の故郷として知られる積丹町。最初に訪れたのは町内に残る唯一の練番屋旧山×福井邸。明治終期または大正初期に建築されたと言われ、ガイドの方が住時のヤン衆の生活の様子を丁寧に説明して下さった。その後は、かの有名な景勝地・神威岬へ。積丹町の方が「冬の積丹の厳しさをぜひ体感してほしい」と強風が吹きつける岬を案内。水平線を見渡せる場所を目指して歩き始めると、留学生たちは何度も風に煽られる。これがある意味ユニークな体験となったのか、みんなの表情は常に明るく、最後は冬の日本海をバックに笑顔で記念撮影をした。

初日に積丹町の魅力を心行くまでエンジョイした留学生。翌日は町内の小学校 4 校と中学校 1 校に分かれてそれぞれの交流活動へ。学校に到着すると、この日を楽しみに準備してきた子どもたちが大歓迎してくれた。各学校では、餅つき体験やパンケーキ作り、かるたなどの日本の遊び、また染色体験など様々なプログラムを用意。限られた時間の交流だったが、すぐに打ち解けた雰囲気へと変化し、給食後にはすっかり友達のように。卓球や鬼ごっこをして遊びながら、留学生も子どもの頃に戻って時間を過ごしていた。

今回の参加者の多くは札幌市内の大学で学んでいるが、道内の町村に行ったり、地域の住民や子どもたちと交流したりする機会はあまりない。交流を終えた後は「またこのようなプログラムに参加したい!」と口々にしていた。また、積丹町の子どもたちにとっても、留学生を通して外国のことを身近に感じ学べる最高の機会。双方にとって魅力的なプログラムで、「国際交流 in 積丹」が 17 年間も継続している意義はあまりにも大きい。



強風が吹きつける神威岬をバックに記念の一枚



さっぽろ 留学生・日記

サルミン シシル さん

バングラデシュ人民共和国
北海道大学大学院
地球環境科学研究院



【共通点は自然豊かなキャンパス】

南アジアに位置し、日本の4割ほどの国土に約1億5千万人が暮らすバングラデシュ。大河が何本も流れ「川の国」とも呼ばれる。水と緑からなる美しい景観が作り出され、世界最長の天然の砂浜を持つビーチもある。シシルさんは、ダッカからバスで1時間ほどの地の利に恵まれた歴史ある港湾都市・ナラヨンガンジ市の出身。母国では父親の影響で環境地理学を専攻。「都市部にあるダッカ大学より自然が豊かなジャハングルナガル大学を選びました。キャンパス内には大きな池や湖があり、学生以外の人も訪れます。北海道大学みたいです」と教えてくれた。父親が海外への留学を勧めてくれ、研究テーマを学べる北海道大学を選んだ。難関の奨学金試験にも合格し、現在は「都市化に伴う森林の攪乱」をテーマに、統計や衛星イメージをベースに研究を進める毎日。「日本の学習

環境には非常に満足しています。国際的なジャーナルに簡単にアクセスでき、研究に必要な書籍も研究室で準備してくれます。大学の施設も整っていて、帰国したら同じような施設を母校に作る事が私の目標です」と思いを語ってくれた。

【大好きな日本食と雪景色】

北海道に来てから三年目となるが、来日当初は言葉の壁にぶつかることも。「全て日本で書かれていて苦労しましたが、日本語と英語のキーワードで何とか乗り切れました。日本で出会った人は親切にしてくれたので、今は自分が同じ振る舞いができるよう心がけています」。日本食に慣れるのにも少し時間がかかったが、今では大好きに。お寿司、焼きそば、特にかけそばがお気に入り。今では自宅で天ぷらそばを料理することも。

バングラデシュには暦の上では6つの季節があるが、さすがに降雪はない。今では、雪景色をいつも楽しみにしていて「雪が降った次の日の静寂に包まれた朝に散歩に出かけるのが大好きです」とすっかり冬の生活に馴染んだよう。

研究を継続するか帰国するかは思案中だそうだが、9月には博士課程を終えるシシルさん。いずれの道を選択しても、シシルさんがバングラデシュの森林減少の問題に北海道での研究成果を取り入れ、水と緑あふれる国土の発展に貢献していくことは間違いないだろう。

フェアトレードタウン さっぽろを目指して



11月23日（木・祝）札幌国際プラザ交流サロン（札幌市中央区）

フェアトレードとは、生産者と消費者の間で、人としての暮らしを分かち合い、地域と地球の持続可能な未来を築こうとするもの。2000年に世界で最初に「フェアトレードタウン宣言」をしたのはイギリスにある人口5,000人の小さな町・ガースタング。その後、フェアトレード運動は急速に広まり、現在世界33か国2,000以上の自治体が宣言を行い、日本では熊本市、名古屋市など4つの自治体が宣言（2017年11月末現在）。この度、なぜ札幌市がこの取り組みを行っているかを参加者ととも考えることを目的にイベントが開催された。

第一部は「フェアトレードとは何か」と題し、フェアトレード北海道代表理事である北星学園大学の萱野教授の講演でスタート。夜の地球の写真や1杯のコーヒーの価格構成をスライドに投影し、身近な話題から先進国と途上国の違いを参加者に訴えた。続いて、北星学園大学の学生で構成する「北星フェアトレード」による取り組みの発表。同会は日常的に勉強会を開催し、経済学部授業の一環として道内でフェアトレード商品を扱う店舗数の調査を行っている。現在は大手スーパーチェーンがフェアトレードのチョコレート、コーヒーやバナナなどを扱い始め、調査を開始した2011年に比べると札幌市内での取り扱い店舗数が約3倍まで増加。宣言をするために必要な目標値まであと僅かなところまで来ていると示していた。発表者の学生が、「洋服を買うときに、高くても長く着られるものを購入するようになった」と、生産者に思いを馳せるようになった変化を語っていたのが印象的だった。



日頃の取り組みを紹介する「北星フェアトレード」



コーヒーなどのフェアトレード商品を購入する参加者

第2部では、テーマ「フェアトレードタウンさっぽろ」について、第一部の萱野氏の他に札幌市環境局、公益社団法人全国消費生活相談員協会、アパレル店舗のマネージャーが登壇して行われた。ディスカッション後の質疑では、「フェアトレード商品の中にトレンドを掴むものがあれば、若者がSNSで発信しフェアトレードが日常になるのでは」と、より活動を推進するための意見もあった。会場内では札幌市内でフェアトレード商品を扱う団体が出店。参加者はハンドメイドの小物やチョコレートなどを購入し、自らの消費活動を通じて「フェアトレード」を身近に感じるイベントとなった。